

国際研究部門

比較神学的対話（Conversations in Comparative Theology）と真宗学

—宗教間対話の経験をとおして—

嵩 満 也

はじめに

世界仏教文化研究センター国際部門では、2016年度から4年間にわたり、「比較神学的対話（Comparative Theological Dialogue）」を行った。キリスト教、イスラームそして浄土真宗の研究者であり同時に信仰者でもある共同研究者が、龍谷大学（2016年）、ドイツ・ミュンスター大学（2017年）、アメリカ・ジョージタウン大学（2018年）、アメリカ・仏教大学院（2019年）と会場を移し、毎回ほぼ同じメンバーが参加し、与えられた神学的なテーマについて発表を行い、他の宗教からの参加者2名が発表へのコメントを行うという形式を毎回踏襲して行った¹⁾。また、その成果の一部はすでにセンターのEジャーナル等に公表されている²⁾。

この報告論文では、研究プロジェクト全体について網羅的に取り上げることはできないが、今回のプロジェクトが行われることになった経緯を明らかにすることを主な目的としたい。今回のプロジェクトを行うについては1980年代以降、龍谷大学で行われてきた宗教間対話の実践がある。そこで、まず1960年代以降キリスト教神学界を中心に宗教間対話が活発に行われるようになった歴史的・思想的な背景について紹介し、比較神学的対話という今回の試みがどのような背景と意図を持つものであったのか明らかにしておきたい。そして、その上で1980年代後半以降龍谷大学が積極的に行ってきた宗教間対話の事例をふり返りつつ今回のプロジェクトの意義について考えてみたい。

1. 20世紀における宗教間対話の展開

20世紀に世界の宗教界で起こった重要な出来事をもしいくつかあげるとすれば、キリスト教神

学界を中心に広く行われるようになった宗教間対話（Inter-religious Dialogue/Interfaith dialogue）が、必ずその一つとして数えあげられるであろう。

宗教間対話がそれ以前にまったく見られなかったわけではない。けれども、それまでの対話の多くは、排他的あるいは護教的な性格を強く持つものであった。対話と言いながら、自分たちの信仰の絶対性や優位性を誇示し、対話の相手に改宗を迫ることも見受けられた。

しかし、20世紀半ばのキリスト教神学界で生まれた宗教間対話への機運は、そのような排他的・護教的な目的から生まれたものではなかった。2度の世界大戦を経験した20世紀のキリスト教界が、戦争と破壊に対してまったく無力ではなかったという反省の中から生まれたものであった。ドイツのカトリック神学者ハンス・キュングの「世界平和は、諸宗教間の平和なしには成り立たない。諸宗教間の平和は諸宗教間対話なしには成り立たない。³⁾」という言葉は、そのことを端的に示すものであったが、その言葉は戦後のキリスト教界が再出発するためには不可欠な宣言であった。そのような厳しい歴史認識の上に立ってキリスト教世界に1960年代以降大きなうねりとなって広がったのがエキュメニズムと呼ばれる神学運動である。

エキュメニズムすなわち教会一致運動は、古代から見られるキリスト教の統一をめざす運動であるが、キュングらが呼びかけたこの運動は、単にカトリック、東方正教、プロテスタントと分裂したキリスト教会の神学的一致をめざすだけでなく、長い間ヨーロッパ社会において疎外され迫害されてきたユダヤ教との和解、さらには信仰を異にする異教徒との融和をめざす宗教間対話の実践につながるものであった。

そのきっかけをつくったのは、ローマ教皇ヨハネ23世であった。悲惨な戦争を経験したキリスト教界は、ただ宗教的な領域に閉じこもるべきではなく、人類共通の問題を教会自身の問題としなければならないと決意したヨハネ23世は、『地上の平和』と呼ばれる回勅を公布し、世界中のカトリック司教たちをバチカンに招集して、公会議を開催することを宣言したのである。そして、1963年から1965年にかけて第2バチカン公会議が開かれることになった⁴⁾。この公会議がキリスト教界における宗教間対話の扉を開いたのである。

公会議直前の1963年にヨハネ23世が亡くなり、その遺志を引き継いで公会議を主宰した教皇パウロ6世は会議の目的として4つの課題を提示した。すなわち、①教会の本性への自覚を深めること、②教会の内面の刷新をめざすこと、③キリスト教の一致を促進すること、④現代世界との対話を深めるということである。公会議では、この与えられた課題に沿ってさまざまな具体的なテーマが立てられ、世界じゅうから集まった司教たちによる議論が行われた。そして、1965年には4つの憲章がカトリック教会の活動指針として公布された⁵⁾。その中で、特に宗教間対話を促す役割を果たしたのは、「我らの時代に」（Nostra Aetate）という宣言であった。

この宣言において、カトリック教会はそれまでのユダヤ教に対する排他的な関係を悔い改めることを宣言し、さらに「教会の外に救いはない⁶⁾」という15世紀のフィレンツェ公会議以来公認されてきたカトリック教会の閉鎖的なドグマを180度転換し、「開かれた教会」として諸宗教間と

の対話を進めることへと大きく舵を切ったのである。一方、そのようなカトリック教会の動向に連動して、プロテスタント教会でもプロテスタント諸派の代表により構成される世界教会協議会（WCC）が結成され、カトリック教会との協調や異宗教間対話の重要性が確認された⁷⁾。このことにより、キリスト教界における宗教間対話は新たな次元へと進展することになった。

まず、歴史的に分裂をしてきたカトリック教会とプロテスタント・東方正教の諸教会における宗教内対話（Intra-religious Dialogue）が活発化した。その成果として、キリスト教諸教会が協力して、共同訳の聖書がさまざまな言語で刊行された。このことは宗教改革以降のキリスト教の歴史を大きく変える出来事であった。また、同じ一神教としての伝統を持ちながら、長年にわたり排他的な対応を行い、迫害してきたユダヤ教との和解のための対話をはじめられた。さらに、一神教どうしの対話という枠組みを超えて、仏教やヒンズー教など非一神教の宗教との宗教間対話（Inter-religious Dialogue/Interfaith Dialogue）が試みられるようになった。また、19世紀以降の西欧社会でキリスト教批判の最先鋒であったマルクス主義との対話さえも行われるようになった。

1960年代になると、キリスト教側が主導するかたちではあったが、日本でも仏教とキリスト教との間の宗教間対話が少しずつ行われるようになった。周知のように仏教には、キリスト教におけるエキュメニズムのような思想運動は歴史的にほとんど見られない。ブッダが入滅した後、仏教はいくつかの部派に分かれ思想的に対立をし、南伝仏教の伝統（上座部仏教）と北伝仏教の伝統（大乘仏教）に分かれて別々の発展を遂げてきた。さらに、その発展の過程で、さまざまな伝統や宗派が生まれた。しかし、それをひとつに統一しようという運動は起こらなかった。時の権力者や王権が、伝統や宗派を擁護し、それを住人に強制することはあっても、仏教の側にそれを統一しようという動きは見られない。たとえば南伝仏教の伝統では、経・律・論の三蔵が基本的に共有され、北伝仏教では特に中国仏教の伝統以来、仏陀の教説として膨大な大蔵経を認め、釈尊が悟りを開き涅槃に入るまでの間に説かれた多数の経典を形式・方法・順序・意味内容・教義内容等から、高低・優劣を判定するということは行われたが、それを統一しようとはしなかった。そのかわりに古くから対話あるいは論議ということが重視されてきた。すなわち、ドグマのような統一された固定的教義を立てるよりも、対話・論議をとおして融和的に意見の統一がはかられた。そのことは、仏教の異なる信仰を持つ人々に対する態度にも共通して見られた。その意味で、仏教にとって宗教間対話ということはそれほど抵抗感なく受け入れられるものだったと考えることができる。

しかし、仏教にはたとえばキリスト教という他者との対話から自らの信仰に対する自己理解を深めるという態度は極めて希薄であった。そのことは、多くの仏教とキリスト教の対話において、キリスト教の側が積極的にかかわり、仏教の側はどちらかといえば受け身的に対応することが多いことの原因ともなった。対話に対する内的必然性において、明らかに仏教とキリスト教の間には温度差があったのである。さらに、キリスト教界が、平和への願いだけでなく特に2つの世界

大戦に対する深い自責の念から宗教間対話を内的必然性と理解し取り組んでいたのに対して、日本の仏教界には、とりわけ戦争協力に対する検証や深い自覚がないまま、対話がすすめられたことにも留意することが必要である。ただ小論では、そのことについては指摘するにとどめておきたい。いずれにしてもそのような側面を持つものではあったが、キリスト教を思想背景に持つ西洋哲学の研究者やキリスト教信仰の本質に関心を懐く宗教学者や仏教者を中心に、仏教の側でも少しずつ対話の場に参加するようになっていった。その中で、1980年代から積極的に宗教間対話に取り組むようになったのは龍谷大学であった。

浄土真宗を建学の精神とする龍谷大学は、1989年に創立350周年を記念して「比較を超えて—宗教多元主義と宗教的真理」というテーマで国際シンポジウムを開催した。シンポジウムでは、ハーバード大学のキリスト教神学者と龍谷大学の真宗学者が対話の意義と宗教的真理について議論が行われた⁸⁾。さらに90年代には、龍谷大学の武田龍精が中心となり、主にキリスト教神学者との宗教間対話が継続的に行われた。その中には、プロテスタントのプロセス神学者として有名なジョン・B. カブ、宗教多元主義の神学を提唱したジョン・ヒックといった神学者との対話もあった。幸い筆者もそれらの対話に参加する機会を与えられたが、「宗教的真理は多か—か」あるいは「キリストとしての阿弥陀仏」といったテーマについて、刺激的で内容の濃い神学的対話が繰り広げられた⁹⁾。宗教間対話の積極的な意義を語り、多元的な宗教状況の中で異なる宗教間の共存・共生を模索する、キリスト教神学界を牽引する著名な神学者たちとの真剣な対話は、共通した宗教状況の中であって、浄土真宗の真実性を明らかにすることをその使命として担っていかなければならない真宗学を研究する者にとって、この上もなく刺激的で忘れられない経験であった。

しかし、1990年にイラクによるクウェート侵攻が起こり、翌年には湾岸戦争が勃発する。そして、2001年9月11日にはアメリカ同時多発テロの報復としてアフガニスタン戦争始まり、2003年にはイラク戦争が引き起こされる世界情勢の中で、イスラーム原理主義という言葉が宗教間の対立を煽るかのように用いられ、『文明の衝突』という言葉が、宗教間には対話では越えられない文明間の溝でもあるかのように人口に膾炙するようになった。その結果、キリスト教社会でも仏教社会でも、それまであった宗教間対話への関心や熱気は大きく減退していった。

そのような中でも龍谷大学では、2009年に創立370周年の記念事業として、大学創立350周年の宗教対話の精神を継承して、再びハーバード大学の神学者を招聘した対話を主催した。その対話の内容についてはあとで詳しく触れたいが、20世紀半ば以降の寛容と和解という時代的な雰囲気から、新たな分断と対立の登場という時代の変化が対話に影を落としていたように思われる。たとえば、それまでの「宗教的真理」、「神」あるいは「救済」の概念といった形而上学的な議論は影を潜め、宗教的チャプレンの養成などそれぞれの宗教が持つ社会的役割といった、「大きな物語」ではなく「小さな物語」をお互いに共有するための対話となった¹⁰⁾。

はじめに述べたように、2016年より世界仏教文化研究センターのプロジェクトとして4年間

行った宗教間対話は、まさにその延長線上にあるものである。では今回の「比較神学的対話」というテーマには、どのような意図があったのか。

2.

2017年から開始した今回の世界仏教文化研究センターでの研究プロジェクトでは、「比較神学的対話 (Conversations in Comparative Theology)」という神学界の議論の中でも比較的新しいアプローチのもとで行うこととした。

比較神学的対話という今回のアプローチを提案したのは、ドイツ・ミュンスター大学の宗教学・文化神学 (Intercultural Theology)¹¹⁾ 講座教授であるペリー・シュミット＝ルンケル (Perry Schmidt-Leukel) であった。彼は2017年に宗教学界では最高の栄誉の一つとされるギフォード・レクチャー¹²⁾ に招聘された現代の宗教学界を代表する研究者である。また、「宗教間の神学」 (Interreligious Theology) の論客としても高名な神学者であり、長年にわたりキリスト教と仏教やヒンドゥー教などとの宗教間対話に積極的に従事してきた経歴を持っている¹³⁾。

イギリスのグラスゴー大学で行われたギフォード・レクチャーでシュミット＝ルンケルは、“Interreligious Theology: The Future Shape of Theology” (「宗教間の神学：神学の将来のかたち」) というタイトルで講演を行った。その冒頭で彼は、宗教間の神学とはどのようなものかということについて、次のように述べている。

宗教間の神学は、理想的には諸宗教の歴史全体ではあるが、原則的に複数の宗教伝統に基づく神学的探求を意味する。この講演では、宗教間の神学が、今後ますます重要になることを主張したい。なぜなら、宗教間の神学はとどまることのない宗教多元状況を反映するものであり、原理主義や相対主義という流れに対抗する確固とした立場を提供するものだからである。それは、潜在的な宗教間の紛争の可能性を低減させ、諸宗教間対話による真理探究の次元の広がりを重視する神学なのです¹⁴⁾。(筆者訳)

この発言から分かるように、シュミット＝ルンケルは「宗教間の神学」 (Interreligious Theology) を、一般に「諸宗教の神学」と翻訳される Theology of Religions と明確に区別している。諸宗教の神学とは、1980年代にジョン・ヒックが主張した宗教多元主義に強い影響を受けて発展した神学の一分野であり、端的に言うならばキリスト教以外の諸宗教に果たして救いの可能性はあるのかということについて探求することを目的とする神学である。

一方、同様にヒックの宗教多元主義に大きな影響を受けたシュミット＝ルンケルは、自らの立場を宗教間の神学と呼んでいる¹⁵⁾。それは、「理想的には諸宗教の歴史全体ではあるが、原則的に複数の宗教伝統に基づく神学的探求」のことである。すなわち、キリスト教内部の神学的議論としてではなく、諸宗教の歴史全体を視野に入れながら、個々の宗教伝統の神学的議論を尊重しつつ「複数の伝統に基づく神学的探求」を言えば比較宗教学的に理解しようとする神学だとする

のである。

ではなぜ今回のテーマを宗教間の神学的対話としないで、比較神学的対話とすることになったのか。そもそも比較神学とはどのようなものか。それはシュミット＝ルンケルが提唱する宗教間の神学とどのような関係にあるのか。

比較神学は、ハーバード大学神学部の神学者でカトリックの信者でもあるフランシス X. クルーニイ（Francis X. Clooney）が提唱している神学の新たな立場である¹⁶⁾。彼によれば、それは特定の信仰の立場に立ちながら、宗教間の相互理解（比較）に深く参与する、「理解を求める信仰（faith seeking understanding）¹⁷⁾」に基づいて構築される神学のことである。クルーニイはその方法論的特質について、従来の宗教間対話に見られる3つの立場と比較神学の立場とのちがいを使って説明している。すなわち、1）宗教学における比較宗教とどのように異なるのか、2）諸宗教の神学（Theology of Religions）とどのように異なるのか、3）宗教間対話とどのように異なるのかということを明らかにすることで、比較神学とはどのような神学であるのかについて語っている。

自著 *Comparative Theology: Deep Learning across Religious Borders* の中でクルーニイは、まず比較神学は比較宗教学とどのようにちがうのかについて、次のように説明している。比較神学と比較宗教学とは、ともに宗教の比較研究に関心をもつという点では同じである。けれども、比較宗教学はさまざまな宗教伝統の類似性と差違性に中立的な立場から吟味しようとするのに対して、比較神学は他の宗教伝統の洞察に照らして自らが信仰する宗教について神学的省察を行うことに焦点を当てる神学であるという点で比較宗教学とは異なっていると指摘している¹⁸⁾。

比較神学は比較宗教学のように類似性や差違性に関心の中心があるのではなく、異なる宗教伝統の洞察に照射されることにより生まれる、自らの宗教伝統についての省察を重視する。すなわち、比較神学における比較の目的は、どこまでも「理解を求める信仰」としての学び（learning）という点にある。信仰にもとづく対話を通して新たな神学的洞察を生み出す学びに比較神学と比較宗教学のちがいがあるのである。またこのことは、何のために宗教間対話を行うのかという、宗教間対話の場でこれまで何度も繰り返し問われてきた問に対するクルーニイの解答だと言ってもよい。

たとえば、1980年代以降、宗教間対話において最も大きな影響を与えたのは、イギリスの神学者でカトリックの信仰を持つジョン・ヒックの宗教多元主義の思想であろう。ヒックは、第2バチカン公会議以降広く行われるようになった宗教間対話に見られる、キリスト教の真理性・絶対性・優越性を強く主張する姿勢を排他主義的態度と呼び、宗教間対話における不適切なアプローチとして厳しく批判した。また、カトリック教会がそれまで異端視してきたプロテスタント教会の信者たちを、「離れた兄弟たち」と呼び、その信仰の中にある真理性を否定せず、部分的にはあれ認めるかたちで歩み寄ることで対話を行うようになっていた。しかし、ヒックはそのことに潜む問題を指摘する。すなわち、一方の神学と自分たちの神学のちがいを言わば括弧に入れて、受け入れられる部分だけを認める包括主義的な対話にも問題があると批判する。たとえばカト

リック神学者カール・ラーナーが「無名のキリスト者¹⁹⁾」という呼び方で、キリストの福音を聞いた事のない者もキリストを通して救われる可能性を持つ、とする抱括主義的な主張には他の宗教伝統に対するキリスト教の優越観が潜んでおり、そのような対話の姿勢にはキリスト教至上主義が隠されていると指摘する。それに対してヒックは、「宗教はいずれも神の実在に対するそれぞれの歴史や風土を踏まえた経験であり応答であると定義し、どの宗教にも真理性は存在していると説く²⁰⁾」立場が宗教多元主義であり、宗教間対話は、排他主義はもちろん、包括主義的な立場でもなく、宗教多元主義の立場から行うべきだと主張したのである。

ところで、ヒックの宗教多元主義では、そのように自らの伝統を相対化する相対主義的視点が求められる。しかし、相対主義にとどまるならば宗教間対話の目的は比較宗教学と同じく知的な関心か第三者的な関わり方から抜け出ることにはできない。それでは比較宗教学の関心と何らかわることがない。クルーニイの立場は、ヒックが説く宗教多元主義の意義は認めつつも、そのような欠点に神学的立場から答えようとするものだと理解することもできる。クルーニイは、宗教多元主義がそのような意味で比較宗教学的な立場に陥る危険性について問題視し、比較ということを信仰の学びと理解することで、その問題を解決しようとしているのである。

実は、ヒック自身もクルーニイと同様、自らの伝統を相対化するという立場をとりつつ、信仰とは「神の実在に対する人間のさまざまに異なる応答²⁰⁾」であり、その点ではどの信仰も本質的には同一であるとも言う。ただしヒックは、人格的な神であっても非人格的原理であっても究極的リアリティとしては本質的に同一であり、それを「一者」と名づける。この「一者」に対するさまざまに異なる応答が信仰の違いだとする。従って、宗教多元主義の立場からの宗教間対話は、単なる知的関心のためのものではなく、超越的な究極的リアリティに参与する個々の信仰の立場を認めるものだと語る。しかし、ヒックのように「一者」という目的を設定することには、彼自身が包括主義として否定したはずのラーナーの立場に潜むキリスト教至上主義的な枠組みが残されている。宗教多元主義の立場に立つシュミット＝ルンケルの宗教間の神学もクルーニイの比較神学も、そのようなヒックの宗教多元主義が内含している課題、すなわち宗教の普遍性と個々の信仰の特殊性をどのように折り合いをつけられるのかという、宗教多元主義にもとづく宗教間対話が抱えこむ方法論的な難題に真正面から向き合おうとする試みだと言うこともできる。

次に、比較神学と諸宗教の神学がどのように異なるとクルーニイが考えているのかについて取り上げてみよう。諸宗教の神学は、エキュメニズムにもとづいて提唱された神学で、宗教多元状況の中で他の宗教との対話をとおして、キリスト教としての自己理解を深めようとする神学的営みである。まずクルーニイは、比較神学はキリスト教信仰と他の諸宗教との出会いに対する関心ということでは、諸宗教の神学と同じ関心を持つと言う。しかし、二つの神学はその視点と目的においては明らかに異なっているとも指摘する。諸宗教の神学は、救済やキリストといったキリスト教の教義に照らして他の宗教との関係を明らかにしようとする。たとえば、キリスト教におけるキリストと他の宗教における究極的なリアリティとを比較しようとする。それに対して、比

比較神学はキリスト教の立場から他の信仰を理解するのでなく、それぞれの信仰の独自性あるいは特異性について耳を傾け、そのことから深く学ばいとなみだと語る。つまり、「基本的に比較神学とは、どの宗教が真実の宗教であるのかについて考える神学ではなく、自分の信仰について明らかに語るにより、他者の信仰の光の中で、宗教間の境界を越えて学ぶもの²²⁾」であるとクルーニイは定義している。

「他者の信仰の光の中で、宗教間の境界を越えて学ぶ」というクルーニイの対話の姿勢は、既にプロテスタント神学者ジョン B. カブが『比較を超えて—仏教とキリスト教の相互変革の展望 (Beyond Dialogue)』(1985) の中で主張している点でもある。カブは宗教間対話の要諦について、「われわれが対話を超えることができるのは対話を通じてだけである。対話を超えようとしない対話は対話に停滞する。²³⁾」と主張する。また、「真正の対話は、対話を超える新しい展開が種々、つづいてなされるような仕方に対話参加者を変える²⁴⁾」ものであり、「対話を超えて横たわっているものは、相互変革の志である²⁵⁾」と指摘する。すなわち、対話をとおして仏教者は仏教者として自己をより深く理解し自己変革を遂げることができ、同様にキリスト者はキリスト者として自己をより深く理解し、自己変革を遂げることができるところに、カブは宗教対話の視点と目的があるとする。クルーニイの比較神学の構想は、その意味でカトリック神学の中から生まれたものではあるが、プロテスタント神学者のカブの考えに近いと言える。

さらに最後の比較神学が宗教間対話とどのようにちがうのかという点についてクルーニイは、比較神学も宗教間対話も、対話をとおして他の宗教の主張に深く耳を傾けることでは同じであると言う。けれども、比較神学は「他者が自分たちの信仰について語ることに耳を傾ける以上に、自分たちの宗教伝統と同じくらい他の宗教について心から学ぼうと心がけなければならない。²⁶⁾」と指摘する。そこには昨今のキリスト教神学界における宗教間対話の形骸化に対する批判が込められていると推察される。特に9.11同時多発テロ以降、宗教対話をとおした他者理解への関心の低下に対する危機感のあらわれがあるように見える。

以上のように、クルーニイが提唱する比較神学とは、比較宗教学という学術的探求の道とも異なるものであり、キリスト教の神学的関心に基づく宗教間対話とも異なっている。また、対話のための対話に終わる宗教間対話ではなく「学びを求める信仰」の神学だとするのである。さらにその背景には、宗教多元状況という現状認識に加え、それまでのキリスト教神学界における宗教間対話に対する姿勢への厳しい批判があると思われる。

ところで、このようなクルーニイの批判は、仏教についても当てはまる。たとえば、仏教界ではキリスト教という他者との宗教間対話への関心、さらにはそのことにより自らの信仰に対する自己理解を深めるという態度は希薄である。仏教とキリスト教の宗教間対話は、多くの場合キリスト教の側が積極的にかかわり、仏教の側は受け身的に対応していることが多い。キリスト教から何かを学ぶというよりも、キリスト教からの問いかけに受け身的に応えるという態度で対話に臨むことが多い。対話の内的必然性について、仏教とキリスト教の間には明らかに温度差が存在

するのである。その理由として、宗教哲学を専門とし浄土真宗の僧侶でもある高田信良は、仏教では対話を通して相手から何かを学ぶというより、自らの仏教理解を新たな仕方では表現したいという関心が高いと指摘しているが、正鵠を得た指摘であろう²⁷⁾。

クルーニイ自身も表明しているように、今回のプロジェクトの視座となった比較神学という対話へのアプローチは、まだ作業仮説的なものだと言ってよい²⁸⁾。その意味で比較神学という宗教間対話の実践理論を実験的に検証しようという意味合いを持つ。プロジェクトのテーマを「比較神学的対話」としたのもそのような理由からであった。しかし同時にそこには、これまで浄土真宗の神学である真宗学において積み重ねられてきた宗教間対話の経験とそのことを通しての学びが大いに生かされているのである。

そこで最後に、今回の宗教間対話に至る、龍谷大学を舞台に行われてきた過去の宗教間対話の経験と学びについて、実際に参画してきた筆者の経験を踏まえつつ述べてみたい。

3.

既に述べたように、龍谷大学では、1989年に創立350周年を記念して「比較を超えて—宗教多元主義と宗教的真理」というテーマで国際シンポジウムを開催した。このシンポジウムは仏教の側が主導して日本で行われた最初の本格的な仏教とキリスト教との宗教間対話であったと言ってよい。

テーマが示しているように、会議では宗教間対話における3つの課題が議論の焦点となった。すなわち、如何にして宗教間対話は「比較を超えて」本当の意味での実質的な他者との対話となることができるのか、またグローバル化する現代世界で重要になる「宗教多元」状況の中で仏教とキリスト教の対話はどのような意味を持ちうるのか、そして、宗教間対話の共通の基盤となる「宗教的真理」についてそれぞれの宗教はどう理解するのかという課題である。表現を変えて言うならば、まず宗教間対話をどのように意味あるかたちで行うことができるのかという「対話の方法」の問題、宗教間対話にはどのような意義があるのかという「対話の意義」の問題、そしてそのような対話が成立する上での共通の理念的な基盤をどこに置くのかという「対話の基盤」の問題という3つの課題が会議のテーマとして設定されたのである。

シンポジウムでは、ハーバード大学神学部の3人の教授が「親鸞と現代」という統一テーマのもとで、それぞれの関心から親鸞思想について自由なかたちで問題提起を行った。比較宗教学とヒンドゥー教思想を専門とするジョン・カーマンは、インド宗教思想の系譜の中で親鸞の他力思想を位置づける試みを行った。親鸞思想を日本仏教という思想的な枠組を超えて、仏教の源流までさかのぼり、インド宗教思想というより広い脈絡の中においてもその特質をとらえることができるというカーマンの指摘は、比較宗教学の方法論が持ちうる射程の広さと深さを印象づけるものであった。また、サンスクリット学を専門とする永富正俊は、「真宗学の国際化」という

テーマで、真宗学が国際化するために求められる方法論的課題について取り上げた。永富は文化人類学的な視点を用いつつ、比喩的にグローバル化した現代世界では、それぞれの宗教伝統は、emic すなわち自らの伝統に対して内部（部内者の視点）から分析するだけでなく、etic すなわち第三者の視点から分析することが求められていることを強調した。その上で、宗教間対話といういとなみは、そのような現代思想の大きな潮流であり、真宗学の国際化にとって大きな意義を持つと指摘した。さらに、組織神学を専門とするゴードン・カフマンは、「宗教的多様性と真理問題」という宗教多元主義の中心的テーマについて議論を展開した。それは共通した「対話の基盤」をどこに置くのかという議論でもあった。またカフマンは、「対話的真理（Conversational Truth）²⁹⁾」という、対話をとおして自己開示する真理のあり方について語ったが、縁起観にもとづく仏教のダルマ観との親近性に筆者自身大きな関心を懷いたことを記憶している。

改めて振り返ると20年前に行われた宗教間対話の議論の枠組みと、今回の比較神学的対話の議論の枠組みには、それほど大きな変化はないようにも見える。しかし、対話の方法や基盤そして扱う内容は多くの点で異なっている。それは、その後継続的に行われた多くのキリスト教神学者との対話の経験によるところが大きい。

アーノルド・N. ホワイトヘッドの哲学に影響を受けプロセス神学者として有名なジョン・B. カブは、3度にわたり龍谷大学を訪れて対話に従事した。先に触れたように、カブは『対話を超えて』という著作の中で「対話の意義」について端的に「対話を超えて横たわっているものは、相互変革の志である」と語っている。1995年に行われた龍谷大学での対話の場面でも、カブは同じように、排他主義的な対話はもちろん、包括主義的な対話さえ超える相互変革的な対話こそ宗教多元状況における宗教間対話のあり方であるべきだとくり返し説いた。筆者自身、実際にそのようなカブの誠実な発言に対して大きな感銘を覚えたことを今でも覚えている。

その一方で私にとって大きな疑問として残ったのは、当時龍谷大学の学長を務めていた真宗学の信楽峻磨とカブとの対話でのやりとりである。

「自分たちの伝統が語ってきた真理にこだわらず、対話の中で相手が語る言葉の中に含まれている真理を本当に理解するなら、対話を超えて、キリスト者はキリスト者として、また仏教者は仏教者として、お互いに自己変革をすることができる。」と主張するカブに対して、信楽は「キリスト者はキリスト者として、真宗者は真宗者として、自分たちが信じている宗教的真理をもって対話を始める」ことが誠実な宗教対話ではないかと指摘した。ここには、宗教多元主義が内含する相対主義の問題よりもさらに根源的な宗教間対話における問題が露わになっているように感じられた。言うまでもなく、宗教対話が単純な二項対立的な議論に陥るならばそこに対話をする意義は認められない。排他主義的な宗教対話の問題点はそこにある。しかし、もしお互いに違いがあるならば、まず違いは違いとしてお互いに認めるべきではないか。それぞれが自ら信じるものがあるとするれば、たとえそれが相い容れないものであっても、そこから対話を始めるべきではないか。信楽はそう指摘したのである。それに対して、カブはそのことの意味は理解しつつも、対

話はあくまで自己変革にこそ意味があると応答した。その時には、どちらの言い分にも納得する部分が筆者にはあった。ただ、カブのリベラルで理想主義的な主張に対して何かしらの漠然とした疑問が残った。しかし、今回の比較神学におけるクルーニイの比較神学の構想に出合うことで、どこに自分の疑問があったのかということに改めて気づくことができたように思われる。

その疑問は、宗教多元主義の提唱者ジョン・ヒックが龍谷大学でおこった宗教間対話についての講演で感じた疑問にも重なるものでもあった。既に触れたようにヒックは、宗教は本質的には同一であるが神的実在に対する人間の対応はさまざまに異なると主張し、その前提の上に宗教間の「対話の意義」「対話の方法」「対話の基盤」を考えている。しかし、そこには実存的個にとって絶対的な意味を持つ信仰内容の相互の異なりについてどう折り合いをつけるのかという課題が手つかずのまま残されている。ヒックとの対話で強く印象に残ったのは、彼が超越的な究極的リアリティとしての「一者」を想定しつつ、宗教間の「対話の意義」を語ると同時に、キリスト者にとっての究極的リアリティとは何かという筆者の質問に対して、キリスト教神学内部で議論されるキリスト論を詳細に延々と説いたことである。ヒックの宗教多元主義は、ヒックにとっては確固とした自分の信仰と矛盾対立するものではない。しかし、そのことがどのようにして両立しうるのかということについてヒック自身が語ることはなかった。

後に、日本のプロテスタント神学者小原克博が、多元主義という理論的枠組は必ずしも中立的なものではなく、その成り立ちからいってもキリスト教における自己理解と他者理解が明らかに反映されており、厳密な多元主義者はキリスト教以外の宗教ではほとんど見られないという指摘³⁰⁾に接し、さらに今回のクルーニイの比較神学の視点を学び知ることによりその疑問の出所によりやく気づくことができた。

クルーニイの比較神学は、ヒックなどの宗教多元主義が内含している課題、すなわち宗教の普遍性と信仰の特殊性をどのように折り合いをつけるかという、宗教間対話に内在する根源的な問題に真正面から向き合おうとしているのである。信仰という個別実存的な問題と宗教多元主義の信仰理解の間にはそもそもずれがあると理解することができる。その問題を方法的に何とか解決しようと試みているのがクルーニイの比較神学なのである。

しかし、龍谷大学での真宗学とキリスト教との宗教間対話は、その後、アフガニスタンと中東を舞台にアメリカを中心とした西洋諸国とイスラーム原理主義テロ組織との間で戦争が相次いで起こり、イスラームとキリスト教の文明の対立であるというイデオロギーに煽られ暫の間途絶えていた。

龍谷大学での宗教間対話が再開されたのは、大学創立370周年の記念事業として、創立350周年に倣ってハーバード大学より神学者を招聘しシンポジウムが開かれた2009年のことであつた。この時は筆者を中心にその計画を進めることになったが、「世界平和は、諸宗教間の平和なしには成り立たない」というエキュメニズムの理念はいわゆる宗教原理主義勢力の台頭により一見無意味なことのようによ扱われるようになっていた。確かに、「宗教的真理」や「一者」について宗

教間で議論するだけでは、「諸宗教間の平和」を実現することはできなかったと言わなければならなかった。けれども、かつてヒックが宗教多元主義を唱えるきっかけとなった身近なコミュニティの中で出会う宗教的な他者との関係は、ますます日常化し、相互理解の重要性もますます大きくなっている。そこで、その時の対話のテーマとして「挑戦と潜在力」ということを掲げた。現在のさまざまな日常的な問題からの挑戦にそれぞれの宗教がどのように対応できるのかを語り合うことで、宗教本来の潜在力がどこにあるのかについて議論したいと考えたのである。従って、対話にあたり「宗教的真理」や「一者」といった、理念的な内容の「大きな物語」ではなく、身近で具体的な「小さな物語」という視点から行ってもらいたいという要望を事前に行った。

この「小さな物語」という考えは、フランスの哲学者ジャン＝フランソワ・リオタールの思想に啓発されたものである。「大きな物語」はその性質上普遍的な歴史を語ろうとする。近代の出発点にある啓蒙主義は理性を持った人間による社会の形成を理想とし、そこに人類の普遍的な歴史とあるべき社会を求める。しかし、「小さな物語」はただ自分たちの身近な経験を語ることでその大きな物語が持つ前提を突き崩していく。その例をリオタールは、大きな物語に支えられた歴史観が生み出した植民地の中から生まれるポストコロニアルな歴史観の中に見る。植民地支配者が語る歴史だけが歴史ではないという事実は、「大きな物語」の普遍性の自明性を失わせるものであると言う³¹⁾。2009年の対話では、それまでの宗教間対話に見られた「大きな物語」、すなわち普遍的価値の問題を、特殊個別な事実の問題の中で検証するかたちで、宗教の潜在力について考えようと目論んだのである。

実際にそのような目的が2009年の宗教間対話において実現できたかは別にしても、その後3回にわたり今度はイランのイスラーム・シーア派の神学者たちとの宗教間対話を行う機会に恵まれたが³²⁾、西洋世界と対立する世界で生活するムスリムの人々「小さな物語」という視点が宗教間対話にとって重要な意味を持つことを筆者に教えてくれるものとなった。そして、2016年から取り組んできたクルーニイの宗教間対話理論に学んだ比較神学的対話は、これまでに筆者が宗教間対話の中で経験した疑問や課題に大きな解決の方向性を与えてくれるものであった。

ただ、クルーニイの比較神学理論にはないいくつかの新たな取り組みを今回のプロジェクトでは取り入れている。一つ目は、仏教とキリスト教の間の対話、あるいはキリスト教とイスラームの間の対話という二つの宗教間の対話、すなわち Dialogue ではなく、仏教、キリスト教、イスラームという三者の間の対話 Trialogue という形式をとったことである。そのことにより共通したテーマについて、より多元的で重層的な対話の場を持つことをめざしたのである。二つ目は、かつて永富が指摘したように、対話が emic な議論、すなわち内部的な神学的議論で終わらないよう、また「大きな物語」に終始しないようにするために、インフォーマルな場をできるだけ多く提供するようにしたことである。3日間の会議の期間中は基本的に参加者は寝食を共にするというかたちで対話を行った。また、それぞれがそれぞれの宗教を代表するような態度で対話するのではなく、一人の信仰者として自分の信仰理解を語り、相手の信仰理解に耳を傾けあうことで

クルーニイの言う「信仰における学び」の場を実現しようとしたことである。

むすび

以上、今回の比較神学的対話プロジェクトが持つ意義について、20世紀の半ば以降の宗教間対話の進展の背後にある歴史的・思想的な背景を紹介するとともに、比較神学という宗教間対話の理論がどのようなものであるのか、今回の対話のアプローチとして取り入れたクルーニイの理論を検討することをとおして考察した。また、龍谷大学でこれまでに行われてきた宗教間対話の意義についてふり返ることにより、宗教間対話といういとなみが、龍谷大学においてこれまでどのように実践されてきたのかについて述べるとともに、今回のプロジェクトにその経験がどのように生かされているのかについて論じた。

1989年の創立350周年記念シンポジウムに先立つ1984年、ハーバード大学の世界宗教研究所で「聖典翻訳と土着化の問題」をテーマに対話が行われた。シンポジウムでは、浄土真宗本願寺派門主大谷光真が招聘され、同行した真宗学者により、当時進行中であった全親鸞文献の英訳事業における翻訳をめぐるテーマについて議論が行われた。特に親鸞の中心思想である「信心」という言葉を faith と英訳すべきが、shinjin とそのまま英語に翻せず用いるべきかについても討議が行われた³³⁾。大谷はその時の式辞で「私達浄土真宗教徒の中で宗教間の対話に関心を持つ者は未だ一部分にとどまっております。この機会に諸宗教間の対話の意義を理解し、今後も引き続いて対話を続けることが出来れば有り難いことであります。³⁴⁾」と表明したが、この言葉を受けて1989年の龍谷大学での宗教間対話が行われたと言ってよい。

その後、浄土真宗とキリスト教との宗教間対話を牽引したのは、真宗学の武田龍精であった。武田は、カフマン、カーマン、カブ、ヒックといった、キリスト教神学界で宗教間対話をリードしてきた神学者たちとの対話を実践し、浄土真宗における宗教間対話の意義について示唆的な多くの論考を発表している³⁵⁾。また、真宗学者として、宗教多元状況という現代的なコンテクストとフレームワークのなかで、神学的に親鸞思想を位置づけようと試みている。そこには、宗教間対話をとおして明らかになってくるこれからの真宗学の課題が既に論じられている。ただ、その内容について今回は取り上げることはできなかった。できれば機会を改めて論じてみたいと考えている。

今回の宗教間対話の実践をとおして、比較神学という視点が宗教間対話に新たな地平を拓こうとしていることを実感することができた。また、宗教がイデオロギー的な対立の中で、あたかも対立軸そのものをなしているような言説がしばしば行われる今日において、改めて対話をとおした宗教者間の相互理解の大切さを認識する機会となった。宗教間対話を行う上での最も難しいことは、他の立場に対する寛容さと自らの立場を堅持することとの間のバランスである言えるが、今後多くの若い真宗の学徒がその新たな試みに挑戦してくれることを期待しつつ擲筆したい。

註

- 1) 4回開催した各校での多元的神学対話のテーマ、参加者、発表タイトル、ならびに開催された公開講演会等は以下の通りであった。

1) The 1st Conference at Ryukoku University, Research Center of world Buddhist Cultures, Kyoto

Date: February 15-17, 2017

Venue:

Theme: Shin Buddhism, Christianity, and Islam-Conversation in Comparative Theology

[Public Lectures]

1. Prof. Perry Schmidt-Leukel, (Münster University German, 2015 Gilford Lecture Laureate)
“A Fractal Interpretation of Religious Diversity”
2. Dr. Keiko Obuse (Kobe City University of Foreign Language)
“Mutual Perception between Buddhists and Muslims-With special reference to Japanese Buddhists' perspectives”

[Trialogue]

Session 1: Buddha's Teaching, Revelation, Logos”

“Then Teaching as Truth in Shinran”

Prof. Denis Hirota (Ryukoku University)

“Revelation in Islam”

Prof. Imtiyaz Yusef (Mahidol University)

“Buddha's Teaching, Revelation, Logos: A Christian Perspective”

Prof. Perry Schmidt-Leukel (Münster University)

Session 2: Universality and Exclusivism

“Universality and Exclusivism in Religious Dialogue from Perspective of Shinran Thought”

Prof. Mitsuya Dake (Ryukoku University)

Prof. Junya Shinoe (Doshisha University)

Prof. Peter Phan (George Town University)

Session 3: Myth and History

“Myth and History in Shin Buddhist Thought”

Prof. David Matsumoto (the Institute of Buddhist Studies)

“Myth and History in Islamic Religious Thought”

Prof. Maria Dakake (George Mason University)

“Myth and History in Christian Thought”

Prof. James L. Fredericks (Loyola Marymount University)

Session 4: Amida, Allah, Trinity

“Revitalizing the Monothetics Discourse of Creation: Two Buddhs's Views”

Prof. Eisho Nasu (Ryukoku University)

“A Muslim Perspective of Concept of Ultimate Reality”

Prof. Elif Emirahmetoglu (Münster University)

“Christian Doctrine of the Trinity: Distinctive concerns and possible encounters with Buddhism and Muslim”

Prof. Bernhard Nitsche (Münster University)

2) The 2nd Conference at Münster University, Münster in Germany

Date: July 12-14, 2017

Theme: Evil and Self-Awareness

[Public Lectures]

1. Prof. Imtiyaz Yusuf (Mahidol University) "Buddhism, Islam and Politics in South- and Southeast Asia"
2. Prof. Mouhanad Khorchide (Münster University) "Islam and Inter-Faith Relations"

[Trialogue]

Session 1: Karmic Evil, Sin, Suffering, and Predestination

"Karmic Evil, Sin, Suffering, and Predestination: A Shin-Buddhist Perspective"

Prof. Eisho Nasu (Ryukoku University)

"The Mind al-Qur'an—Sin, Suffering, and Predestination"

Prof. Imtiyaz Yusuf (Mahidol University)

"The Christian Understanding of Evil"

Prof. James Fredericks (Loyola Marymount University)

Session 2: Practice, Prayer, and Transformation "The Real Is Transformative Dynamic: Shinran's Concept of Shinjin"

Prof. Dennis Hirota (Ryukoku University)

"God's Mercy Encompasses All, but Whom Does God Love?"

Prof. Maria Dakake (George Mason University)

"Practice, Prayer, and Transformation"

Prof. Perry Schmidt-Leukel (Münster University)

Session 3: Repentance and Forgiveness, Aspiration and Hope

"Repentance and Forgiveness; Aspiration and Hope : A Shin-Buddhist Perspective"

Prof. David Matsumoto (the Institute of Buddhist Studies)

"Sin and Forgiveness in Islam and Its Meaning for the Afterlife"

Prof. Mouhanad Khorchide (Münster University)

"Being Saved and Being Just: Grace and Salvation in the Christian Tradition"

Prof. Peter Phan (George Town University)

Session 4: The Nature of Human Existence

"A Shin Buddhist Perspective to the Nature of Human Existence"

Prof. Mitsuya Dake (Ryukoku University)

"Existence of Human Being in Islam"

Prof. Junya Shinohe (Doshisha University)

"Conceptions of the Human: A Christian point of view"

Prof. Bernhard Nitsche

3) The 3rd Conference at George Town University, Washington D.C. in the USA

Date: June 27-29, 2018

Theme: Salvific Action

[Pre-Conference Panel] Buddhist-Christian-Muslim Conversation on Salvific Action

"What can a Buddhist learn from Islam?"

Dr. Keiko Obuse (Kobe City University of Foreign Language)

"Shinran, Kierkegaard and The Sickness unto death"

Dr. Daniel Rumel (Münster University)

"Salvific Action in the Tension between Human Free Will and Predestination"

Prof. Elif Emrahmetoglu

[Public Lectures]

1. Prof. Leo Lefebure (George Town University) "Go, Tell It on the Mountain: Salvific Action in Light of African American Christian Experience"

2. Prof. Dennis Hirota (Ryukoku University) "Learning from Others: Engaging the Shin Buddhist Path in the Contemporary World"

[Trialogue]

Session 1: Wisdom-Compassion, Divine Love/Mercy, and Transcendence

"Wisdom and Compassion, Exposure and Embrace: a Shin Buddhist sense of transcendent immanence"

Prof. David Matsumoto (the Institute of Buddhist Studies)

"The Name and the Vow: Reading Exodus 3 with Shinran"

Prof. James Fredericks (Loyola Marymount University)

Session 2: Shinjin, Nembutsu, Surrender/Faith, Remembrance, and the Prophetic Voice

"Shinran's idea of Realization in Shinjin and Nembutsu"

Prof. Mitsuya Dake (Ryukoku University)

"Surrender, Faith, and Remembrance"

Prof. Leo D. Lefebure (George Town University)

"Muhammad: A Human Prophet"

Prof. Imtiyaz Yusuf (Mahidol University)

Session 3: Amida's Directing of Virtue: Grace, Justice, and Moral Life

"Amida's Directing of Virtue and Its Moral Implications in Shin Buddhist Faith and Practice"

Prof. Eisho Nasu (Ryukoku University)

"Grace and Salvation in the Christian Tradition"

Prof. Peter C. Phan (Georgetown University)

"Deepening Belief in Islam with the Divine's Directing of Virtue: An Examination of the 'Three Fundamental Principles of Islam' by Muhammad bin Abdul-Wahhab"

Prof. Junya Shinohe (Doshisha University)

Session 4: Naturalness (jinen), Fitra, Spirit

"The Real Is Transformative Dynamic: Shiran's concept of Jinen"

Prof. Dennis Hirota (Ryukoku University)

"Simul Bodhisattva et Icchantika: A Christian Reflection on Jinen"

Prof. Perry Schmidt-Leukel (Münster University)

4) The 4th Conference for Publication Project at Institute of Buddhist Studies, Berkeley in the USA

Date: June 11-12, 2019

Participants:

Prof. James Fredericks (Loyola Marymount University)

Prof. Perry Schmidt-Leukel (Münster University)

Prof. Imtiyaz Yusuf (Mahidol University)

Prof. David Matsumoto (the Institute of Buddhist Studies)

Prof. Mitsuya Dake (Ryukoku University)

Prof. Eisho Nasu (Ryukoku University)

Prof. Dennis Hirota, Ryukoku University, Japan

2) これまでに「比較神学的対話プロジェクト」の研究成果の一部として、以下の論文を公表している。

・Perry Schmidt-Leukel「宗教多様性のフラクタル的解釈」龍谷大学アジア仏教文化研究センター編『2016年度研究報告書』2017年: "A Fractal Interpretation of Religious Diversity" *Journal of*

- World Buddhist Cultures*" Research Center for World Buddhist Cultures ed. 2020.
- ・ Mitsuya Dake "Universality and Exclusivism in Religious Dialogue from the Perspective of Shinran's Thought" *Study of Shinran Pure Land Buddhism*. Academy of Shin Buddhist Studies ed. 2017.
 - ・ Dennis Hirota "Learning from Others: Engaging the Shin Buddhist Path in the Contemporary World" *Journal of World Buddhist Cultures* Research Center for World Buddhist Cultures ed. 2020.
 - ・ Mouhanad Khorchide "Islam and Inter-Faith Relations" *Journal of World Buddhist Cultures* Research Center for World Buddhist Cultures ed. 2020.
 - ・ David Matsumoto "Shin Buddhist Theological Studies—The Study of Religious Narrative" *Journal of World Buddhist Cultures* Research Center for World Buddhist Cultures ed. 2020.
 - ・ James L Fredericks "Myth and History in Christian Thought: Renunciation and Retrieval" *Journal of World Buddhist Cultures* Research Center for World Buddhist Cultures ed. 2020.
 - ・ Mitsuya Dake "Universality and Exclusivism in Religious Dialogue from the Perspective of Shinran's Thought" 龍谷大学真宗学会編『真宗学』137・138合併号、2018年。
- 3) ハンス・キュング、吉田収久 保田浩訳『世界諸宗教の道—平和をもとめて—』世界聖典刊行協会、2001年、270頁。
 - 4) 第二バチカン公会議がテーマとした「教会の現代化」ということは、公会議以前から既にカトリック教会の中で議論されてきた問題であった。たとえば、既にカール・ラーナーやイヴ・コーンガールなどのように、近代社会で人類が獲得した経験知を伝統的なカトリック信仰と調和させるが必要であるという神学者と、ヨーゼフ・ラッツィンガー（後のローマ教皇ベネディクト16世）やアンリ・ドゥ・リュバックなどのように、古代教会の信仰にこそ現代教会の活力の源泉が見出されるとする神学者の対立があった。このことから、エキュメニズムの運動のすすめ方についても、自ずと二つの大きな流れが生まれることになった。
 - 5) ①の「教会の基本的自覚」に関しては『教会憲章』、②「教会の内面生活」に関しては『典礼憲章』、③の「教会の一致」については『啓示憲章』、④「現代世界との対話」に関しては『現代世界憲章』が出された。
 - 6) 「キリスト教以外の諸宗教に対する態度についての宣言」、南山大学監修『公会議公文書全集—公会議解説叢書7』中央出版社、1976年、351頁。
 - 7) 世界教会協議会 (World Council of Churches) は、全世界のキリスト教会によって作られている協議会で、WCC と略称される。プロテスタント諸派を中心に設立され、カトリック教会は加盟していないが、東方正教会は参加している。もともとは、教会一致運動の端緒となる1910年のエジンバラ世界宣教会議を契機として、世界諸教会間に協力活動を求める動きが活発となったことから、国際宣教協議会などが組織され、2度の世界大戦で活動は停滞したが、1948年にアムステルダムに44ヵ国147の諸教会から代議員が集まり、世界教会協議会として結成された。
 - 8) その成果は、龍谷大学三五〇周年記念学術企画出版編集委員会編『人間・科学・宗教』（思文閣出版 1991年）として刊行されている。発表された論文のタイトルは、以下の通りである。
 - ・ 信楽峻磨「親鸞と現代」
 - ・ ジョン B. カーマン「アジア諸宗教の中の親鸞思想」
 - ・ 永富正俊「真宗学の国際化」
 - ・ ゴードン D. カウフマン「宗教的多様性と真理問題」
 - 9) Jon. B. Cobb は、1995年に「はじめて龍谷大学を訪問し、2000年、2005年と3回来学して、講演を行った。そこで発表されたペーパーは以下の通りである。
 - ・ J. B. Cobb "Is Religious Truth may or One?"（「宗教的真理は多か一か」）日本思想学会『比較思想研究』第22号、1996年。

- ・ J. B. Cobb “Amida and Christ” 「阿弥陀とキリスト」 武田龍精編『世界宗教対話—仏教とキリスト教』永田文昌堂、2001年。
 - ・ J. B. Cobb “Buddhism and Natural Science” 『2002年度龍谷大学人間・科学・宗教 ORC 報告書』、2003年。
- 10) その成果は、龍谷大学創立370周年記念事業講演録『21世紀歴史大学シンポジウム』(龍谷大学創立370周年記念事業事務局編 2010年)として刊行されている。宗教間対話が中心となったのは、第二部龍谷大学・ハーバード大学学術シンポジウム「21世紀の世界と親鸞—挑戦と潜在力」である。以下の発表が行われた。
- ・ 大谷光真「21世紀の世界と親鸞」
 - ・ ジョン B. カーマン「浄土真宗と比較宗教」
 - ・ アン・ハーリントン「仏教と科学—出会いの展望」
 - ・ ドナルド・スウェラー「悟りの倫理学」
 - ・ ジャネット・ギャツォ「ハーバード大学神学部の仏教伝道」
- 11) Intercultural Theology とは「文化の神学」とも翻訳されるが、異なる文化・社会に広がり根付いたキリスト教信仰に見られる正義・平等・神などの神学的概念についての理解を、比較あるいは対話をとおして明らかにし、キリスト教内の相互理解を深めるための神学の分野である。20世紀を代表するプロテスタント神学者ポール・ティリッヒの神学は、よく文化神学 (Theology of Culture) と呼ばれるが、それは宗教と文化、教会と社会、神学と哲学などの境界線上に立ちながら、それらを相関させ、両者の深い次元での統合を目指す神学のことを指し、それとは区別される。
- 12) ギフォード・レクチャーは、1888年にアダム・フォード・ギフォードの遺志により創設された、年1回開催される学術講演会である。講演者にはその時の一線級の学者が招聘され、スコットランド学術界最高の栄誉とされる。第1回の講演者は、東洋学・比較言語学者であり比較宗教学の祖とされるマックス・ミュラーであり、その後ウィリアム・ジェームズ、カール・バルト、パウル・ティリッヒ、ユンゲル・モルトマン、ニニアン・スマート、レイモンド・パニカー、ジョン・ヒック、イアン・バーバーなど、講演者には神学あるいは宗教学分野の学者が多く選ばれており、宗教界最高の栄誉となる講義と評価されている。
- 13) シュミット＝ルンケルがこれまでにに行った宗教間対話の成果を出版したものとして、以下のようなものがある。
- ・ *Understanding Buddhism*, Edinburgh: Dunedin Academic Press 2006.
 - ・ *Transformation by Integration. How inter-faith encounter changes Christianity*, London: SCM Press 2009.
 - ・ *Buddhism and Religious Diversity*, 4 vols., New York 2013.
 - ・ *Buddha Mind – Christ Mind. Buddhist-Christian Relations in Asia*, St. Ottilien: EOS-Editions 2017.
 - ・ *A Christian Commentary on the Bodhicaryāvatāra*, Leuven: Peeters 2019.
- 14) 筆者日本語訳。https://www.giffordlectures.org/lectures/interreligious-theology-future-shape-theology (2021年8月1日アクセス)
- 15) シュミット＝ルンケルは、今回龍谷大学で行われた比較神学的対話の基調講演で「宗教多様性のフラクタル的解釈」について語った。フラクタルという言葉は、自己相似した特定のパターンを意味する。彼は、構成要素あるいは構造の周期が一定であるか、全体を通してとても似通った様式をさすフラクタルを宗教の多様性を理解するモデルとして提示した。すなわち、
- 宗教はすべて同じでもなければ、完全に異なったものでもないのです。宗教は、その宗教内に見られる多様性ということではお互いに似通っていますが、それぞれを異なった性質において構成しているのです。
- と指摘し、

フラクタル解釈は、宗教を静的な同類の形態で見るのではなく、宗教内部の多様性および雑種性にも目を向けさせ、一方である一つの自らの伝統のなかで類似した構造のものをを見つけ出す、という点において、我々にとって有用なのです。この類いの宗教の多様性を見ることは、宗教間の対話をするという目的において非常に意義があります。

(ペリー・シュミット＝ルンケル「宗教多様性のフラクタル的解釈」龍谷大学アジア仏教文化研究センター編『2016年度研究報告書』2017年。)

と述べている。今回の宗教間対話が宗教間の神学としてではなく比較神学として行われたのは、比較宗教学者でもあるシュミット＝ルンケルの関心と重なるところがあったと考えることができる。

- 16) クルーニイが比較神学について書いた文献としては、

- ・ *An Experiment in Comparative Theology*, State University of New York Press: New York 1993.
- ・ *Comparative Theology: Deep Learning across Religious Borders*, Wiley-Blackwell: Hoboken 2010.

などがある。クルーニイは比較神学とは「宗教的な境界線を越えた深い学び (Deep Learning Across Religious Borders)」を実践することであるとする。また比較神学は、特定の信仰の伝統に根ざしつつ、一つまたは複数の他の信仰の伝統から学ぶことであるとする。従って、それは21世紀における宗教多様性への一つの応答としての神学であるとする。また、比較神学の特質として「創造的な緊張」の中で「比較」と「神学」を結びつけることをあげる。すなわち、特定の宗教的伝統（「神学」）に根ざしつつ、深い宗教間の対話をともし学習（「比較」）するところに比較神学の方法論的特質があるとしている。また別の角度から説明して、宗教の神学はキリスト教信仰の規範的主張に照らして他の宗教を理解し、キリスト教信仰と他の宗教的伝統との関係を明らかにしようとするものだが、比較神学は、主にどの宗教が真の宗教であるかについてではなく、彼らの信仰に照らして、私の信仰の真実を明らかにする方法で宗教のちがいの垣根を越えて学ぶところに宗教の神学との違いがあるとも指摘する。

- 17) Francis X. Clooney *Comparative Theology: Deep Learning across Religious Borders*, Wiley-Blackwell: Hoboken 2010, p. 9.
- 18) Ibid., p. 9-16.
- 19) カール・ラーナーが「無名のキリスト者」という表現をはじめて使ったのは“Das Wort der Dicht und Christ” (*Schriften zur Theologie*, Vi, Benzinger, 1967, p.452) という芸術神学の論文で、第2バチカン公会議以降のことであるとされる。
- 20) 南部千代里「J・ヒックの宗教多元主義における問題についての一考察」日本国際情報学会雑誌『国際情報研究』15巻1号、2018年、28頁。
- 21) ジョン・ヒック、間瀬啓充訳『神は多くの名前を持つ』岩波書店、1986年、19頁。
- 22) Francis X. Clooney *Comparative Theology: Deep Learning across Religious Borders*, Wiley-Blackwell: Hoboken 2010, p. 15-16.
- 23) ジョン・B・カブ・Jr., 延原時之訳『対話を超えて—キリスト教と仏教の相互変革の展望』行路社、1985年、6頁。
- 24) 同右、95頁。
- 25) 同右、97頁。
- 26) Ibid., p.13.
- 27) 高田信良「真宗とエキュメニズム」『仏教文化研究紀要』30 龍谷大学仏教文化研究所、1991年1991年、89頁。
- 28) Francis X. Clooney *Comparative Theology: Deep Learning across Religious Borders*, Wiley-Blackwell: Hoboken 2010, p. 15-16.
- 29) ゴードン D. カウフマン「宗教的多様性と真理問題」龍谷大学三五〇周年記念学術企画出版編集

委員会編『人間・科学・宗教』思文閣出版 1991年。

- 30) 小原克博「宗教多元主義モデルに対する批判的考察—「排他主義」と「包括主義」の再考」『基督教研究』69巻 2号、2007年、30-32頁。
- 31) ジャン＝フランソワ・リオタール『ポストモダンの条件』小聲社、1986年参照。
- 32) 2012年に龍谷大学で2013年にイラン・コム宗教大学で、ムスリムの仏教学者と浄土真宗の研究者との研究交流をはじめた。現在は、世界仏教文化研究センター国際部門の浄土真宗、イスラーム、キリスト教における「念仏・ジグル・イエス」の祈りという「神秘思想」の比較研究プロジェクトとして発展している。
- 33) このときの討論については、ハーバード大シンポジウムと米国東部研修団編『アメリカの宗教を訪ねて』1986年として、非売品であるがまとめられている。
- 34) 大谷光真「浄土真宗と諸宗教」ハーバード大シンポジウムと米国東部研修団編『アメリカの宗教を訪ねて』米国東部研修団編『アメリカの宗教を訪ねて』1986年、17頁。
- 35) 武田龍精が発表した論文として以下のものがある。
 - ・「神学と真宗学」『浄土教の研究』石田充之博士古稀記念論文集 1982年。
 - ・編著『親鸞浄土教とキリスト教』永田文昌堂 1996年。
 - ・「宗教多元主義と真理問題 (一)」『日本佛教学会年報—佛教と他教との対論—』第62号 1997年。
 - ・「宗教多元主義と真理問題 (二)」『真宗学』95号 1997年。
 - ・「親鸞浄土教再解釈の一視座—宗教多元時代における浄土教の脱構築」『宗教研究』82巻 2号 2008年。